

## クレマンの恋愛続唱, 1538以前

村田 八 東

(1995年9月27日受理)

クレマン・マロ Clément Marot が得意とした書簡詩 épître は当然ながら宛先を要した。16世紀の詩論家セビエ Thomas Sebillet<sup>(1)</sup> は épître と悲歌 élégie の識別に苦慮したがヴィヤネー Joseph Vianey<sup>(2)</sup> は長短, 脚韻, 詩型を問わず, 作品受理の相手があるのなら, これみな一種 épître と, 彼の épîtres 論を進めるにあたり敢えて詩型を問題としなかった。実際 Marot 詩の多数がかなりはっきり宛先を持ち<sup>(3)</sup> 後世の碩学達は次々とその実在を確認して来た。すると詩人の恋の対象だけが何時迄も身元不詳で残るのであった。

第二詩集, 《続, クレマンの青春賦》<sup>(4)</sup> 中, 《雪の10行詩》Le dixain de Neige が問題であった。(以下, 引用の詩と n° はすべて Œuvres complètes de Clément Marot. Ed. Critique par C. A. Mayer. The Athlone Presse, 1958-1980, 6vol)

### XXIV

*D'Anne qui luy jecta  
de la Neige<sup>1</sup>*

Anne (par jeu) me jecta de la Neige  
Que je cuidoyis froide certainement ;  
Mais c'estoit feu, l'experience en ay je ;  
Car embrasé je fuz soubdainement.  
Puis que le feu loge secretement  
Dedans la Neige, où trouveray je place  
Pour n'ardre point? Anne, ta seule grace  
Estaindre peult le feu que je sens bien,  
Non point par Eau, par Neige ne par Glace  
Mais par sentir ung feu pareil au mien.<sup>2</sup>

《アンヌが悪戯で私に雪を投げた  
雪は冷い筈なのに ;  
これは火だった,  
突然, 火傷したのがその証拠。  
雪の中には火が潜む,  
焼死せぬには何処に行く  
アンヌよ, あなたの好意だけが  
吾胸の炎を鎮め得る  
水でない, 雪でも氷でもない

あなたが私と同じ炎を感じて呉れるなら》

(Epigramme XXIV)

Pétrarque 流の衒飾表現 concetti に乗って謎のアンヌ, Anne mystérieuse の登場である。アベル・ルフラン Abel Lefranc の身元確認 authenticité が定着する迄, 人々は3世紀間迷った。女王 Anne de Bretagne 以来, アンヌはフランスでポピュラーな名前と成り<sup>(5)</sup> 《女性なき宮廷は花なき春の如し》<sup>(6)</sup> などと仰せあるフランソワ一世 François I<sup>er</sup> の, 現代には仲々に計り難い移動宮廷には, 沢山の女官達, Marot の相手になりそうな Anne は何人も居たからである。Anne de Pisseleu, Anne d'Albret, Anne de la Fontaine, Anne de Beauregard……

何れ錚々たる高位女官達である。18世紀はこれに王姉 Marguerite d'Angoulême, 女官筆頭 Diane de Poitiers 迄, 加えたから増々訣が分らなくなった。

R. Fromage, E. Philipot の研究経て1914年 A. Lefranc の発見, 指摘が決定的であった<sup>(7)</sup>。詩人歿後<sup>(8)</sup> の Marnef 版中に出現した1個の8行詩 Huictain が問題の鍵である。

CCVIII

*Huictain*<sup>3</sup>

J'ay une lettre entre toutes eslite ;  
 J'ayme ung pais, & ayme une chanson :  
 N est lettre,<sup>4</sup> en mon cœur bien escripte,  
 Et le pais est celuy d'Alençon ;  
 La chanson est (sans en dire le son) :  
 Alegez moy, douce, plaisant brunette ;<sup>1</sup>  
 Elle se chante à la vieille façon,  
 Mais c'est tout ung, la brunette est jeunette.

8行詩, Huictain

《あらゆる文字の中から, 私は一文字を選ぶ  
 私は一つの国を愛するし, 一つの唄が好きだ,  
 Nこそ吾胸に刻まれた文字,  
 国はアランソンの公国だ ;  
 旋律こそつけね, その唄は,  
 《慰めよ吾心, 優しく楽しブリュネット》<sup>(9)</sup>  
 唄は古いが構わない,  
 ブリュネットは若いのだ》

(Epigramme CCVIII)

N字は16世紀 Ane と発音された<sup>(10)</sup>。従って, この詩は, Marguerite d'Angoulême の最初の夫 Duc d'Alençon の異母弟, Charles, bâtard D'Alençon の娘, アンヌ・ダランソン Anne d'Alençon を名指している, と言うのが Lefranc 氏の主張であり, 不満の人々も抗

い難く同調に傾いた。

Marot 詩の魅力に酔って、この大学者は沢山の詩を援用しながら、《16世紀仏宮廷の微笑みの如き》<sup>(11)</sup> この少女と真摯な詩人の交流を再現しようと試みた。例えば彼は残存27篇の *élégies* 中9個が Anne をテーマにしていると主張している。以来 Anne 宛の作品は増減し続ける。一連画面 *Séquence* と順序 *Ordre* が問題なのだ。研究者は何時も真に厄介な、作詩年月の決定に碎身する。《この詩は某選文集 *recueil* に初出、従ってそれ以前の制作。》しかも手稿の日付も署名も無かったりした。

A. Grenier が《Marot の生涯は白日下にある。》<sup>(12)</sup> という時、これは資料は出尽した、の意味に過ぎない。彼の伝記は、判明した僅少の点的事実、即ち公的事件への関与とか、投獄、亡命、贖罪等の、余り芳しからぬ記録の間を、彼の作品内容を主に繋いだものであるから。公文書は、又、事件は、日付を確定する。しかし、古来、詩人が事実を詳述する義務などありはしない。この条件下で詩人の恋の現実を組み上げるのは難事と言うより不可能である。現事実でなくて幾篇かの詩作品がここにあるだけだ。

一体に Marot は Genre には拘るのだが、配列への関心、奈辺にあるのか計り難い。後世はこの雑多混淆を年代順に或いは Genre 別に整理しようとし、事件毎には *Séquence* が造られた。悪疫快癒の一連 *Epigrammes* XXXVI から XLI。又その宛先である王室の医者達は、この病と盗難を王に訴える有名 *épître* XXV<sup>(13)</sup>, V. 71 にも登場し比較的関連の見易い一例であろう。

しかし恋愛詩には、事件と言える程のものは殆ど無く、心情がそれも大方は詩人側だけの感懐が述べられるのだから凡そ始末が悪かった。そこから類推の、個なる女性は仲々に浮び来ず類型ばかり増えるのである。Marot の宮廷恋愛詩も殆ど現事実を描写せず、それは詩作口実の一刷毛に済ませて、虚実は問わね、心理を唄ひ、その彼方に16世紀の知性、感情の在処を語った。

さて、Anne に関する最初の *Séquence* は先述の第二詩集中、小詩 *Le Menu* の項に整理された4つの10行詩 *Dixain* であろう。

## XXII

*Le Dixain de May qui fut ord  
Et de Febvrier qui luy fait tort*<sup>1</sup>

L'an vingt & sept, Febvrier le froidureux  
Eut la saison plus claire & disposée  
Que Mars n'Avril. Brief, il fut si heureux  
Qu'il priva May de sa Dame Rosée ;  
Dont May tristé a la Terre arrousée  
De mille pleurs,<sup>2</sup> ayant perdu s'Amye,  
Tant que l'on dit que plouré il n'a mye,  
Mais que grand' pluye hors de ses Yeux bouta.  
Las, j'en jettay une foys & demye  
Trop plus que luy quand m'Amye on m'osta.

不快な五月とこれを痛めつけた二月の10行詩  
《1527年、寒冷の二月は、  
三月、四月に優る明るく爽快の季節であった。つまり二月君は五月氏から  
彼の露夫人を奪い去る程の  
仕合せさ。  
かくて哀れや五月、妻失ひて  
散々の涙雨  
はや、泣き尽したかの大雨が目には溢れた。  
あゝ、私も彼の倍以上、涙を霽したさ  
吾ひとの奪われし日》

(Epigramme XXII)

冒頭句《1527年》が、はっきり日付を示して非常に価値があった。この年5月、Marotは王側への出仕を認められている。又ギフレ G. Guiffrey 引用の史的第一級資料《一パリ市民の日記》<sup>(14)</sup>がこの年月の大雨を記述していた。では、この奪われた Dame は何人か？妻と訳出したがダームなら遥げき想いの彼方のひとであって Anne であり得る、しかしこの時点で誰が Anne を奪うのか？ G. Defaux<sup>(15)</sup>はこれ、王へ奉仕の為それ迄の優しき女主人 Marguerite d'Angoulême の手元を離れるの嘆きか、と横槍を入れている。

XXIII

*Du depart de s'Amye*<sup>1</sup>

Elle s'en va de moy la mieulx aymée,  
Elle s'en va (certes) & si demeure  
Dedans moncueur tellement imprimée  
Qu'elle y sera jusques à ce qu'il meure.  
Voyse où voudra, d'elle mon Cueur s'asseur  
Et s'assurant n'est melencolieux ;  
Mais l'Œil veult mal à l'espace des lieux  
De rendre ainsi sa liesse loingtaine.  
Or à Dieu doncq le plaisir de mes Yeux,  
Et de mon Cueur l'assurance certaine.

想われ人の旅立ち  
《最愛の人が去ってしまう  
成程、行ってしまふだ、しかし彼女は  
吾心に、こんなにはっきり刻み込まれ  
ハート死に絶える迄こゝに在ろう  
お好きな所へ行かれたし、吾ハートは彼女のハートを信じている、  
確信あれば怨みもなし  
しかし距離隔って目は不満、

目の喜びは遠くなってしまう  
 さらば、さらば吾目の楽しみ  
 そして吾ハートの愛の確信、真実なれ》

(Epigramme XXIII)

Defaux 解説は、直前の詩で、詩人が流した涙の説明がこの作に見られるとある。すると去る人は、女王 Marguerite だから訳語を訂正せねばなるまい。慕わしいひとの出立に胸を痛める、粋な詩人がここに居るのでなくて、多分女王の行脚の美々しき行列を、此度何故か、供のかなわぬ下僕が独り指を喰えて眺めているの図になる。しかしこれは恋愛詩ではないのだろうか？ 評家達は地位的に懸崖の開きがあるこの主従間に恋愛感情を読まぬよう戒めて来た。Marguerite を Marot の恋人と信じ切った18世紀の Lenglet-Dufresnoy に戻れと言うのだろうか？

次が最初に挙げた《雪の10行詩》

本人の監修を経ぬ出版に苛だって Marot が㊶第一詩集《クレマンの青春賦, L'ADOLESCENCE CLEMENTINE》<sup>(16)</sup> を P. Roffet から出版するのが1532年8月、忽ち版を重ねる。㊷第二詩集《続クレマンの青春賦, LA SVITE de l'adolescence Clementine》<sup>(17)</sup> には日付が無く Roffet の未亡人の元から出版。これの第二版に1534年の日付がある。

1534年10月は例の檄文事件, Affaire des Placards が突発し、異端容疑死刑のリスト第六番目に名を挙げられて、詩人は即刻イタリアは Ferrare へと逐電した。辛酸言う迄もなく1536年10月、漸く帰仏と成る途中 Lyon 滞在, Maurice Scène 中心のリヨン詩派と交流あり。就中、優れたラテン学者であり、その後出版元とも成るエチエンヌ・ドレ, Etienne Dolet と親交を結んだ。

Dolet は当時、リヨン有数の書店, Sébastien Gryphe の校正係であり、彼の出獄祝宴<sup>(18)</sup> には Marot を含めて当時の有名な学者達 Humanists が集まった。

Marot は帰国するや、これ迄の作品を整理して1538年3月、Anne de Montmorency 元帥に提出、これが今に残る有名なシャンティイの写本, Le manuscrit du Musée Condé Chantilly である。この年7月、リヨンの Dolet が、Marot 作品集㊸《Les Œuvres de CLEMENT MAROT》<sup>(19)</sup> を刊行、次いで打返えすように S. Gryphe から同じく、否、微妙に異なる㊹《Les Œuvres de CLEMENT MAROT》が出版された<sup>(20)</sup>。

生前130の版を重ねた作品集のなかで詩人自身の監修が確認できる版 édition は (M. S de Chantilly を除いて) 以上4点のみである。

次いで重要な édition は1542末の㊺Dolet 版と言うことになる。

《Anne》は1538年の éd. ㊸以前には、この《雪の10行》だけに、その名があり、éd. ㊹からあと急激に増える。謎の所以である。

XXV

A Anne<sup>1</sup>

Si jamais fut ung Paradis en Terre,  
 Là où tu es, là est il sans mentir.  
 Mais tel pourroit en toy Paradis querre

Qui ne viendrait fors à peine sentir.  
Non toutesfois qu'il s'en deust repentir ;  
Car heureux est qui seuffre pour tel bien.  
Doncques celluy que tu aymeroyz bien  
Et qui receu seroit en si bel estre,  
Que seroit il? Certes je n'en sçay rien,  
Fors qu'il seroit ceque je voudrois estre.

地上天国の10行詩 Le dixaindu Paradis terrestre.

《この世にパラダイスありとなら

今、君在るところ、まさにこれパラダイス

しかし、あなたにパラダイスを求める者は

苦しむばかり、

しかし後悔すべきでない。

こんな恵みの為に苦しむ者は仕合せだ

一体、あなたが愛するような人は、

こんなきれいな方に気に入られるのは、誰だろう？

とんとわからぬ、

吾こそは、そうありたいと思う他》

(Epigramme XXV)

以上 éd. ㊦中にある4個のDixainがAnneを対象とする最初のSéquenceと考えられるものである。これを㊣と対照する前に、éd. ㊤に1個のDixain. ㊦にもう1個のHuictainが関連するので先に訳出する。

## VIII

### *Du mois de May & d'Anne*<sup>1</sup>

May qui portoit Robe reverdissante,  
De fleurs semée, ung jour semist en place,  
Et quand m'Amye il vit tant frorissante,  
De grand despit rougist sa verte Face,  
En me disant: tu cuydes qu'elle efface  
(A mon advis) les fleurs qui de moy yssent.  
Je luy responds: toutes tes fleurs perissent  
Incontinent que Yver les vient toucher ;  
Mais en tout temps de Madame florissent  
Les grands vertus que Mort ne peult secher.

五月の10行詩 Le Dizain de May

《或日、五月が緑増し行く、

花鏤めた衣をまとめて登場した,  
そして花咲く吾恋人を見て,  
大いに口惜しがり, 緑の面, 朱に染めて  
云うまいことか, どうやらお前, 私から咲出る花の数々も, 彼女の前では顔色なしと  
思ってるな。答えて曰く: 冬の来たるや  
花々は忽ちに枯れ萎む  
されど死も枯らし得ぬマダムの美性  
常時, 咲き匂う》

(Epigramme VIII)

XXXI

A Anne

Incontinent que je te vy venue,  
Tu me semblas le cler soleil des cieulx  
Qui sa lumiere a long temps retenue ;  
Puis se fait veoir luysant & gracieux.  
Mais ton depart me semble une grand'nue  
Qui se vient mettre au devant de mes yeux.  
Pas n'eusse creu que de joye advenue  
Fust advenu regret si ennuieux.

8行詩, Huictain

《あなたがこちらへいらっしゃるのを見た時,  
まるで空の明るい太陽でした。  
長い間, 光さゝずにいて  
やがて, 輝く優雅な姿を見せる太陽です。  
しかし, あなたの御出立は  
まるで眼前に広がる大きな雲のよう。  
あゝ知らなかった, 現われた喜びから  
こんなに辛い愛惜が起ろうなぞ》

(Epigramme XXXI)

①②版と③版の titre 照合

① Le Dizain de May

② Le Dixain de May qui fut ord Et de  
Febvrier qui lui fait tort

③ Le dixain du depart

④ Le dixain de neige

⑤ Le dixain du Paradis terrestre

⑥ Huictain

⑦ Epigramme VIII

Du mois de May et d'Anne

⑧ Epigramme XXII

Le Dixain de May qui fut ord Et de  
Febvrier qui lui fait tort

⑨ Epigramme XXIII Du depart de s'Ameye

⑩ Epigramme XXIV

D'Anne qui luy jecta de la Neige

⑪ Epigramme XXV A Anne

⑫ Epigramme XXXI A Anne

L'Ed. Dolet から Anne は数を増し、堂々詩表題に載った。Anne に関する作品は《五月の10行詩》をもって嚆矢とする。この作の一ヴァリエーション表題は《1527年、仏王、ヴァンセンヌの森に在り給ひし折、クレマン・マロ師造る五月の10行詩》とあり、事実この年5月、宮廷は Vincenne に在った<sup>(21)</sup>。Marot は1519年から王姉に仕えこの年31才、少なくともこの詩制作の前に Anne の面識を得ている筈で、詩人の恋の発端はこの頃と推定される。しかし、次の《おぞましき五月……の10行詩》も冒頭句が《1527年……》と既に御覧に入れた通りで、同年月なら少なくとも詩面上の天候が合致しない。そして詩の対象は Anne なのか、まして、それが Anne d'Alençon であるのか、詩の価値別して不明ならざるを得ないのであった。

次の《Dixain de Neize》は、はっきり Anne 宛である。しかし J. Platard はこの1530年末以前、詩人に雪を投じた Anne と1538年から数を増す Anne とは年齢上からも別人と考えた<sup>(22)</sup>。

又、Lengelet-Deferesnoy は次の Epigramme XXV 《アンヌへ》A Anne に註して、Anne は恩寵得べく Marot が Marguerite 妃に献じた名前である<sup>(23)</sup>。と述べている。

……そう、エピグラム Epigramme だった。

L'Ed. ©の詩題表示は、初めて épigramme の名称と N° に統に統一されている。Dolet との邂逅以来、詩人はすべての、中世短詩型、Huictain, Dizain 等の行数詩表示、他に Envoy, Blason, Etenne 等の呼称をすべて捨て去って短詩エピグラムを採用した。ギリシャ・ローマの各種碑銘に端を発する<sup>(24)</sup> この古詩型は、中世の迷妄を打破しようと志して、却って古代が新しく見え始めた時代の詩人達にとって新鮮に、洒落て見えた。Marot はこの Genre を仏詩に導入した最初の人と言えないものの<sup>(25)</sup>、これを自在に駆使した仏エピグラム創始者の榮譽は彼の頭上にある。余り詩行数に拘泥しない épigramme の伸縮性、脚韻の自在性は、ことの他、この世紀、新鋭詩人のお気に召したらしく、ひと度 épigramme となると Marot は、もはや中世短詩定型を用いなかった。

Marot は、そして Dolet は épigrammes 集を2つの section に分けた。第一集 Premier Livre は大体、1536年の出奔以前作とイタリア滞在期の作を含み、第二集 Second Livre はそれ以後の作品を網羅したものである。

80個の épigrammes を収めた第一エピグラム集には更に Anne 詩と目されるものが幾つかあるが、確定は出来ない。しかし次の2詩は éd. ©①②で、表題にその名を含む。

## LIII

*De Anne à ce propos*

Ouyr parler de madame & maistresse  
 M'est plus de bien que toutes aultres veoir ;  
 Veoir son maintein, ce m'est plus de liesse  
 Que bon propos des aultres recevoir.  
 Avecques elle ung bon propos avoir  
 M'est plus grand heur que baiser une Heleine.  
 Et ne croy pas, si j'avois son alaine  
 (J'entends sa Bouche) à mon commandement



Que ceulx qui ont leur jouissance pleine  
N'eussent despit de mon contentement.

アンヌの気持は。  
《あの方が話題になっていると  
他の如何な女性に会うにも優る喜び。  
あの身のこなし見る時は  
如何なひとから良い言葉受けるより嬉しい。  
彼女と楽しく話していると  
エレヌのようなとキスするより合わせだ。  
思うさま彼女の呼気（唇）を  
得るのなら  
楽しみ溢れる人々も  
わが充足を羨やまぬはないだろう》

(épigramme LIII)

この詩、初出の Chantilly 写本の表題は à ce propos であって、Anne はなし。Defaux は疑念を表している<sup>(26)</sup>。

LXXII

*Du partement d'Anne*<sup>1</sup>

Où allez vous, Anne? que le sache,  
Et m'enseingnez avant que departir  
Comment feray affin que mon œil cache  
Le dur regret du cueur triste & martir.  
Je sçay comment point ne fault m'advertir.  
Vous le prendrez, ce cueur; je le vous livre.  
L'emporterez pour le rendre delivre  
Du dueil qu'auroit loing de vous en ce lieu;  
Et pour autnat qu'on ne peult sans cueur vivre,  
Me laisserez le vostre, & puis Adieu.

アンヌの旅立ち

《何処へ行くのです、アンヌ？ それを知りたい。御出発の前に如何すれば良いか、教えて下さい。私の目が哀れ、この辛い想いを隠すには。  
決して教えてはいけないのは承知です。ですからこのハートをおとり下さい。これをあなたに差上げます。あなたから遠く離れて、この土地で彼（ハート）が感じる悲しみを救う為、これをお持ち下さい。  
そして誰しもハートなしには生きられぬ。  
あなたのハートを私に残して下さい、そしてアディユ》

(Epigramme LXXII)

ここ迄にエピグラム第一集<sup>(27)</sup> から抽出した 8 個のエピグラムの整理番号 VIII, XXII, XXIII, XXIV, XXV, XXXI, LIII, LXXII は種々の疑問を残しながらも, Anne d'Alençon を対象とする一連と見做されている。

疑問だって? VIII と XXII の《5月の歌》は同じ年を言うのだろうか?

XXIII, XXXI と LXXII の《恋人旅立ち》は, 発表年代に 5 年を隔たりがあるではないか?

更に同集, LI の Damoiselle d'Allebret は王姉, Marguerite の夫 Henri d'Allebret の妹でこの人も又 Anne であった。

LI

*Du Ris de ma Damoiselle  
d'Allebret<sup>1</sup>*

Elle a teresbien ceste gorge d'Albastre,  
Ce doux parler, ce cler tainct, ces beaux yeux ;  
Mais en effect ce petit Ris follastre  
C'est (à mon gré) ce qui luy sied le mieux.  
Elle en pourroit les chemins & les lieux  
Où elle passe à plaisir inciter ;  
Et si ennuy me venoit contristrer  
Tant que par mort fust ma vie abatue,  
Il ne faudroit pour me resusciter  
Que ce Ris là duquel elle me tue.<sup>2</sup>

アルブレ姫の笑み

《彼女はさても見事な雪花石膏の喉  
あの優しい話し方, 澄んだ顔色, きれいな眸,  
しかし何より悩ましい微笑みよ,  
これぞ (思うに) 尤も彼女に相応しい  
彼女過ぎ行く小径も場所も  
その微笑みで楽しくしてしまうのだ。  
死に生命, 打碎かれる程,  
悲しみに沈もうと,  
私を蘇らせるのは, 私を殺すあの微笑み,  
他はなし》

(Epigramme LI)

この詩も初出の chantilly 写本に姓の表示はない。即ち《笑み優雅なる或る方, De celle qui a bonne grace a rire》が表題。

尤も、この写本は、提出先が旧教陣営の元帥であり、追放を解除されたばかりの Marot は随所に警戒を要した。

しかし《私はマリーばかりに恋しはしない、ジャンヌも愛の絆 (les liens d'Amour) で私を縛っている。》<sup>(28)</sup> のだろうか？ やがて仏 Pétrarquistes の先頭集団にいる Marot の良きペトラルキスムは全仏に伝播し、イタリア同様行き過ぎて詩人達は《一日に千回も》<sup>(29)</sup> ダーム Dame の為に死ぬのであった。

しかしマリーの詩の tercets を引いておかねば片手落ちだ。Ronsard は《恋をしているのであって、どの恋人も手に入れたがるあの甘い恵みを味わっているのではない》<sup>(30)</sup>。

私はと云えば、たゞ彼女達の手に接吻し、話し、笑い、胸に触れるだけ、こんなしあわせのほかは何も彼女たちに求めない。》

Marot の《愛の絆》は《Alliance》であった。

○

### Rondeaux d'Alliance

次の4個の旋歌<sup>(31)</sup> Rondeaux XXXVI, XXXVII, XXXVIII, XLIX と Epigrammes C VII, C XVI, それに Chanson V は内容のみならず各詩に使われた単語 alliance だけでも関連がある。

ロンドオ Rondeau は古舞踏 Ronde に付随した歌<sup>(32)</sup> に由来し中世詩人愛用の定型詩であった。D'Orléan は実に435個のロンドオを創っている。

Marot 詩に立脚する詩論家 Sebillet は4種の Rondeaux : 1. Triolet, 2. Rondeau simple 3. Rondeau double, 4. Rondeau redoublé ou parfait を解説したが、1. は Marot に用例がなく4. は Marot の作例一個のみで恐らく形に惹かれての言及である<sup>(33)</sup>。

ロンドオは3詩節3 strophes で成立ち、第一節の第一行乃至、1, 2行……或いは全詩行を折返し句 refrain として後続節に加える形。この refrain を第一行の半句 hemistiche だけの rentrement にしたのは Clément の父, Jean Marot の功績である。

効果的な反復は何時も歌謡を弾ませるが、作者にすれば定型は一種の枷である。障壁は軽く、小さいがよろしい。屢々悪口を言われるが、父に学んだ rhétorique, 若き Clément は小詩と言えども厄介なこの詩型を良くこなした。生涯に仕上げた66個の Rondeauxのうち、56個が第一詩集に並んでいる。

そして、ここにこの優雅な旋歌は最後の光を放ち、完成し終焉するのである。

Marot の作例は Sebillet の2. Rondeau simple と3. Rondeau double であり、第一詩句全部の refrain は Rondeau VII, 1個のみであとはすべて冒頭半句 premier hemistiche の rentrement 使用。

2. はこれ (R) を数に入れて12行、脚韻 rimes ABBA ABR ABBR の詩が5個。

あとは、AABBA AABR AABBAR の15行詩である。

XXXVI

RondeauXXXVI

*D'alliance de Pensée*

Ung mardy gras que tristesse est chassée

M'advint par heur d'amitié pourchassée  
Une Pensée excellente & loyalle,  
Quand je dirois digne d'estre royalle  
Par moy seroit à bon droict exaulcée.

Car de rimer ma plume dispensée  
(Sans me louer) peult louer la Pensée  
Qui me survint dansant en une Salle,  
Ung mardy gras.  
C'est celle qu'ay d'alliance pressée  
Par ces attraictz, laquelle à voix baissée  
M'a dit je suis ta Pensée, fealle,  
Et toy la mienne à mon gré cordialle;  
Nostre alliance ainsi fut commencée,  
Ung mardy gras.

想ひのえにし

《哀しみは追払われる或る告解の火曜日に、  
幸ひ、かねて求めた交際について  
正々堂々の素晴らしい考えが浮んだ  
この工夫、王にも相応う、とは申せ  
まさになえられんとす

何故かなら韻踏むを許されたわがわが羽ペンは（伊達でなし）、或る室で踊りつゝ  
不意に浮んだわが想ひ、思われ人を称え得る

或る告解の火曜日に。

私はこのような絆をせがみ  
この強要に低い声、貞節な思われ人になりましょう、  
あなたこそ、心から私の意のまゝの方になりなさい。  
我らの、えにしかくて始まる  
或る告解の火曜日に》

(Rondeau XXXVI)

XXXVII

Rondeau XXXVII

*De sa grand Amye*

Dedans Paris, Ville jolye,  
Ung jour, passant melancolie,  
Je prins alliance nouvelle  
A la plus gaye Damoyselle

Qui soit d'icy en Italie.

D'honnesteté elle est saisie,  
Et croy (selon ma fantasie)  
Qu'il n'en est gueres de plus belle  
Dedans Paris.

Je ne la vous nommeray mye,  
Si non que c'est ma grand Amye ;  
Car l'alliance se fait telle  
Par ung doux baiser que J'eus d'elle,  
Sans penser aulcune infamie,  
Dedans Paris.

高貴の想ひ人  
《パリの中, この良い街で  
或日, 憂ひは吹きとばし  
新たな約束結びたり  
イタリア迄に居るうちの  
一番陽気な嬢様と,

彼女は淑徳身に備え  
想ひ思うに  
先ずあれ程の美女はなし  
パリの中  
彼女の名前は云いません  
高貴のひとゝ云ふばかり  
その約束の交際だ  
彼女からもらった甘い接吻に,  
何の邪念もありません  
パリの中》

(Rondeau XXXVII)

XXXVIII

Rondeau XXXVIII

*De trois Alliances*

Tant & plus mon cueur se contente  
D'alliances ; car aultre attente  
Ne me sçauroit mieulx assouvir,  
Veu que j'ay (pour honneur suivre)  
Pencée, Grand Amye & Tante.

La Pensée est noble & prudente,  
La Grand Amye belle & gente,  
La Tante en bonté veulx pleuvir  
Tant & plus.  
Et ce Rondeau je luy presente ;  
Mais pour conclusion decente  
La premiere je veulx servir,  
De l'aulture l'amour desservir,  
Croire la tierce est mon entente,  
Tant et plus.

三つのえにし

《何しろ迎も、わが心は約束に満足だ  
これ以上に願わしいはない  
重々ね名誉にも、私は  
想ひと高貴の思はれ人と、伯母上を得たのだ。》

想ひは高潔、慎み深い  
思はれ人は美しく、愛らしい  
叔母上の善意請合ふべし  
何しろ迎も  
そこでこの<sup>ロンドオ</sup>旋歌、彼女（Tante）に差上げる。  
第一のもの（Pensée）に私は仕えよう  
他のもう一つ（Grand Amye）の愛に働きたい  
第三番目を信ずるはわが願ひ、  
何しろ迎も》

(Rondeau XXXVIII)

XLIX

Rondeau XLIX

*D'alliance de Sœur*

Par alliance ay acquis une Sœur  
Qui en beaulté, en grace & en douceur  
Entre ung milier ne truouve sa pareille.  
Aussi mon cueur à l'aymer s'appareille ;  
Mais d'estre aymé ne se tient pas bien seur.

Las, elle m'a navré de grand vigueur,  
Non d'ung cousteau, ne par haine ou rigueur,  
Mais d'ung baiser de sa bouche vermeille,<sup>1</sup>

Par alliance.

Cil qui la voit jouyt d'ung treshault heur ;  
Plus heureux est qui parle à sa haulteur,  
Et plus heureux à qui preste l'oreille.  
Bien heureux donc debvroit estre à merveille  
Qui en amours seroit son serviteur

Par alliance.

妹になる契り (alliance)

恋の密約アリアンス, 私は妹を手に入れた。美しさ, 雅び, 優しさ,  
千人居ても彼女に競う女はなし  
吾ハートまさに彼女に靡くのだが  
愛される自信はない。

あゝ彼女はひどく私を傷つけた。  
剣でない, 憎しみや拒絶でない  
紅の唇の接吻で  
アリアンスで。

彼女に会う者の仕合せさ  
彼女に話しかける者の仕合せさ,  
彼女の声きく者の更に大きい仕合せよ  
この恋の下僕となる者は  
素晴らしく仕合せの筈,  
アリアンスで。

(Rondeau XLIX)

CXVI

*De Marguerite d'Alençon,  
sa Sœur d'Alliance<sup>1</sup>*

Ung chascun qui me fait requeste  
D'avoir Œuvres de ma façon  
Voyse tout chercher en la Teste  
De Marguerite d'Alençon.  
Je ne fais Dixain ne Chanson  
Chant Royal, Ballade, n'Epistre  
Qu'en sa Teste elle n'enregistre  
Fidèlement, correct & seur ;  
Ce sera mon petit Registre ;  
Elle n'aura plus nom ma Sœur.

愛の絆による妹, マルグリイト, ダランソン  
《吾手になる作品を  
入手せんとなら  
マルグリイト・ダランソンの  
頭中(記憶)にすべてを求められたし  
10行詩も, 歌も  
王詩も書簡詩も  
忠実, 正確, 確実に,  
彼女頭中に記録なき詩は創らず  
もう, 我妹でなくて  
わが愛らしき登録簿》

(Epigramme CXVI)

この Séquence をつなぐ言葉 Alliance は, そう歴然としてはいない。ロベール辞典なら  
提携 coalition, 合意 entente, 同盟 ligue; 契約 pacte, 親族 parenté……

A Lafranc は Rondeau XXXVII をこの一連の初めに来ると考え, 第一節, 3行の alliance nouvelle は単なる amitié だと述べている。友情, 交際の約束位の意味だろうか?

次の (éd, P. Roffet と逆順だが) Rondeau XXXVI が Marot 流 alliance である。謝肉祭  
最終火曜日の大騒ぎに紛れて, 第三節初句, 詩人は想う人に詩をもって仕える alliance 愛  
の絆, の諾意を得る。これは俗に言う恋愛関係の成立ではない。中世騎士が気高き意中の  
貴婦人 Dame にそれとも知らせず, 剣をもって奉仕したように, 詩人は詩をもって Dame  
に仕えようと考えた訣だ。Epigramme CVII に付した Guiffrey の註が懇切である。《この  
ような約束上の類縁 parentés d'alliance, むしろ選定の創出は XVI 世紀文芸人の風潮で  
あった。そこには騎士道の古い習慣が認められる。これは2人の間に何の肉体上の絆も前  
提とせず1騎士が, 《自分は彼女の奉仕者 Serviteur である》と考える, これを認める女性  
を, 彼の意中の方 sa dame と称する習慣である。

同じく詩人達も, 約束上の恋人 sœur d'alliance を選び, 吾恋人 ma sœur と呼ぶよう決  
められていたのである。詩人達は (言う必要ありや?) この魂のひと âme sœur を就中,  
良い生まれの人, 彼を社会に推挙し得る, 宮廷に覚えめでたい人の間に求めていた。》<sup>(34)</sup>

すると, Rondeau XXXVIII の3つの絆は直ぐ解ける。Anne d'Alençon なら特に断らず  
とも, 今は Navarre 王妃と成った Marguerite d'Alençon の姪 nièce par alliance であっ  
た。安見児得たり, の喜びに, 自らも優れた文学者であり, この時代最大の文芸の被護者で  
あり, Marot にとっては主君である Marguerite の絆 alliance 迄, 確保したのだから少々は  
しゃいでも構わない。詩は友に誇り Marguerite に阿っている。当事者達は暗黙裡にも忽ち  
事情を了解した筈だが後世は当分何も知らなかった。

Alliance の輪 Cycle は更に広がっている。Rondeau XLIX D'alliance de sœur と Epi-  
gramme CXVI De Marguerite d'Alençon, sa sœur d'Alliance が一対と見做されてい  
る。

先ず, Dolet の Epigramme 表題によって, かの大公妃, 仏王姉, ナヴァル女王は暫時,  
否, 何世紀も小侍臣の, 愛らしいレジスターに甘んじておられた? これは Marguerite



de Navarre ではない、詩人の意中の人 Anne の妹, Marguerite d'Alençon, fille de Charles, bâtard d'Alençon と A. Lefranc の指摘に納得しない者は無かった。Anne はハーブシコード épinette を弾いたし Marguerite は歌の上手であったろう。未だ子のない大公妃 Marguerite は 2 人の姪を慈しみ、Marot の才気を愛でて楽しい alliance は完成した。

ただ Rondeau XLIX D' alliance de sœur は表題の字面通り Marguerite に結ぶものだろうか？ それに対する異論を聞かないのだが、詩内容はこの alliance の発端 Rondeau XXXVII De sa grand' amye のヴァリエーションだ。この sœur は吾妹子 ma sœur, Anne に結ぶ方が自然だろう。可愛い registre の Marguerite から詩 1 つ取上げるのも不本意だが、さすれば姉妹同時に付文の無節操からは救われよう。否、いずれこれ又例の amour courtois で実害はないから一向に構わぬのかも知れぬ。

この最初の、宮廷恋愛詩一連に更に 1 個の chanson を加える。

XIV

Chanson V

J'attens secours de ma seule pensée.

J'attens le jour que l'on m'escondira,  
Ou que de tout la Belle me dira,  
Amy, t'amour sera recompensée.

Mon alliance est fort bien commencée.  
Mais je ne sçay, comment il en yra,  
Car s'elle veult, ma vie perira,  
Quoy qu'en Amour s'attend d'estre avancée.

Si j'ay reffus, vienne Mort insensée.  
A son plaisir de moncueur jouyra.  
Si j'ay mercy, adonc s'esjouyra  
Celluy qui point n'a sa Dame offensée.<sup>1</sup>

歌謡 V

《唯一無二のあのひとの救いを待つ、  
追払って呉れるやら  
或日、はっきり云うのやら  
恋人よ、汝が恋は報われむ、とね、

わが縁<sup>エニシ</sup> (Alliance) こそ首尾も良く始まったが  
一体この先、如何なるやら  
お希みならば、わが生命は消え果てる  
恋路進むを望んでも、

拒まれるなら狂気の死  
存分に、このハートをば弄べ  
恋の情けを得るのなら、かって Dame に背くなき  
この男こそ慶賀なり》

(Chanson V)

御覧の通り、唯一の想われ人 *ma sulle penée* は *alliance* によって詩人と結ばれている。  
Chanson だから調子は更に軽いのだが、彼の *Pensée* なら Anne の筈であった。

## 結 び

ここ迄でも、未だ沢山検討すべき詩が残っている。しかし Anne 宛の第二エピグラム集《LE SECOND LIVRE DES EPIGRAMMES DEDIE A AMME》以前に名を伏せたまま、謎の Anne が活躍しているのは分る。この年1527から1528にかけて、王姉再婚、ローマの掠奪 *Sac de Rome*, Bourbon 元帥戦死、イタリア戦争再燃と外況騒然たるものがあるが、宮廷の覚えめでたく吾詩人の恋は却ってこの時期（姓不詳でも呼名 *prénom* だけは沢山出て来る1538年以降に比べての意だが）最も充実していたと考えられる。

少女の方も胸ときめかす程ではなかったにしろ、この才人が嫌いではなかったらしい。

とにかく、ここでは Anne に宛てた、又これから宛てる作品群の芯とも言うべき *Se-quence* の当否、幾許を検討した。甘いべせに封じられたまま (*Rondeau XXXVII*) 現代に届いた16世紀宮廷恋愛 *amour courtois* の一面がここにある。Anne は宮廷恋愛詩の媒体であって *Laure* でも *Cassandra* でも良かったろう。

但し、この Anne 不在なら、数々の Marot の恋愛詩も趣きを変えた筈である。

## 註

- (1) Thomas Sebillet, *Art poetique françois*, éd. F. Gaiffe. (1988) Nizet, Chapitre VII, pp. 153-156 仏最初の *élégie* を創出した Marot 自身これと *épître* の相違を詩型上に求めなかったから Marot の作品に立脚する詩論家の方は、これをニュアンスの差で捕えようとしている。
- (2) Joseph Vianey, *Les Epitres de Marot* (1962) Nizet.
- (3) 物語風の長詩別して書簡詩 *épître* は実在、架空いずれ宛先を要した。しかし *Rondeau Ballade*, *Chanson* に *Epigramme* の宛先は中空に在るだろう、とは言え Marot のエピグラム大半は確かに短く楽しい公開書簡だ。
- (4) LA SUITE de l'adolescence *Clementine*, Paris, veuve P. Roffet, s. d.
- (5) *Œuvres*. éd. G. Guiffrey (1969) t. 1 p. 324.
- (6) Pierre Villey, *Les grands écrivains du XVI siècle, Marot et Rabelais* éd. Champion (1967) p. 12 "François 1er aimait à dire qu'une cour sans femmes est un printemps sans roses."
- (7) Abel Lefranc, *Grands Ecrivains Français de la Renaissance*, éd. Champion, (1969) *Chapite II*.
- (8) *Œuvres Complètes de Clément Marot* éd, M. P. Jannet (MDCCLXVIII) Vol 4.

- (9) この古い Chanson は16世紀詩人達のお気に召した。中世美女のシンボルである高貴神秘の金髪より何やら現実的な活発娘が新時代に似合っていた。ロンサールも同じ詩句を Sonnet にのせた。

《Je vy tes yeulx desoubz telle plantte Qu' autre plaisir ne me peult contenter, si non le jour, si non la nuit chanter, Allege moi douce plaisant' brunette.》

Sonnet XIV (Les Amours de Pierre de Ronsard.

《かの宿命の星辰の下であなたの眼を見た私は  
われを癒せ甘くやさしきブリュネットよ  
と昼も夜も歌うほか  
どんな喜びにも満足しない。》

(ロンサール詩集 高田勇 (1985) 青土社

- (10) M prononcé ame. -Quand Noble Cueur, qui d'or portoit une M En champ d'azur, luy ravyt une lame De son harnoys.

Marot, Chants, 23. -Parmi nos François qui prononcent un e en ceste sorte: bé cé, dé, ef, gé, ache, ka, elle. ame, ane...

N. (Prononc.). -Parmi nos François qui...

(Dic., Huguet)

N 項に引例が無いが、M 項の2詩句、M (ame) と lame の押韻は判然としている。—Ballade の (L'Ed. P. Jannet. 1867, Tome 4, p. 175) Couplet 5. 或る女性の聖母的純潔をめぐる中世風の騎馬試合が描かれた。

- (11) op., cit. A. Lefranc. pp. 19-20.

《Il est nécessaire de reprouire ici l'épître en vers dont il s'agit, puisqu'elle manque à toutes les éditions de Marot, celles de Jannet et de Guiffrey exceptées. Elle va nous offrir le portrait à la fois le fille issue de la maison d'Alençon et qui fut comme le sourire des cours de France et de Navarre vers l'année 1527.》

実はこの1841年に Génin 発見のこの épître が何時迄も厄介なのだが、ここは素直に、ルフランの Anne 像をとっておくだけにする。

- (12) Œuvres complètes, éd. Abel Grenier.

- (13) Epître XXV, Au Roy (Au Roy, pour avoir esté desrobé).

- (14) Le Journal d'un Bourgeois de Paris, éd. Bourrilly. cité par Guiffrey, T. 3, P. 17.

- (15) Clément Marot, Œuvres poétique, T. II éd. G. Defaut. p. 1001.

- (16) L'ADOLESCENCE CLEMENTINE..., Paris, G. Tory pour P. Roffet, 13 novembre 1532.

- (17) LA SVITE de l'adolescence Clementine, Paris, veuve P. Roffet, s. d.

- (18) ラテン語考 Commentarii linguae latinae で Dolet の文名夙に高し、喧嘩殺人を由とする投獄だったが、帯剣の時代である。真偽不明だが Marot も Sagon と口論の折、抜剣の話もある。とにかく王室図書館長であり当時最高の古典学者でもある Guillaume Budé が Dolet 擁護に尽力し、彼の釈放祝には Rabelais, Marot, Toussaint, Macrin……後代に名を残すが当時とすれば、どうやら薪の匂いのする人々が集っている。

- (19) Les Œuvres de CLEMENT MAROT..., Lyon, Etienne Dolet, 31 juillet 1538.

- (20) Les Œuvres de CLEMENT MAROT..., Lyon, Sébastien Gryphius, s. d. (été) 1538.

- (21) Le disain de may faict par maistre Clement marot l'an mil cinq cens XXVII Le roy estant au bois de Vincennes. (ms. de B. M. no. 1717) éd. Mayer. les épigrammes. p. 101.

- (22) ŒUVRES, éd. G. Guiffrey. commentés par J. Plattard T. IV. (1969) Slatkine. P. 71.

- (23) ŒUVRES, éd. A. Grenier. (1938) Garnier. T. II. p. 430 "Epigramme 25. A Anne (c'est le

nom qu'il donne à Madame Marguerite), pour être en sa grâce.

- (24) op. cit., Sebillet, p. 102.
- (25) Cf. Les Epigrammes, éd. C. A. Mayer. Mayerはこの本の序文で仏最初のエピグラム作者を探している。Marotが自作短詩群にエピグラムと銘打ったのは1538年 Chantilly 写本が最初であり、日付のないJ. Bouchetなる人と創始の栄を争っている。
- (26) Œuvres poétique. éd. G. Defaut. (1993) Garnier. T. 2 p. 1023. “Et que cette Anne n'est peut-être pas Anne d'Alençon, mais son norvel amour?”
- (27) Le premier livre des épigrammes. éd. Mayer. T. IV.
- (28) “Je ne suis seulement amoureux de Marie, Janne me tient aussy dans les liens d'Amour,” Les Amours. éd. C. Weber. p. 178.
- (29) “J'aimerois mieus mille, ors encourir. *ibid.*, p. 190. Sonnet XXXI.
- (30) “Je repons à cela, que je suis amoureux, Et non pas jouissant de ce bien doucereus, Que tout amant souhaite avoir à sa commande. Quant à moi, seulement je leur baise la main, Je devise, je ry, je leur taste le sein, Et rien que ces biens là d'elles je ne ne demande. *ibid.*, p. 178.
- (31) Rondeauについて“旋歌”の訳語は斎藤寛先生の《フランス古典哀傷詩》(1993)より借用、他に仲々良い訳語も見当らぬ。
- (32) op. cit., Sebillet. p. 103.
- (33) このロンドオは第一詩節5行を1行ずつ続節各詩行の末尾に繰返した。出牢の喜びがMarotにこの難作業をなさせたものであろう。